

り、皆既におよびて、紫色に見えたり、余茶山菅名は公壽、字は萬、こ、ろをつけて見しに、姪萬年年俗稱は長作、  
 一帯の黒氣起りて、また暗くなり、復する時、又黒氣見えしが、これはそのま、剝たり、其黒氣は  
 月中のみにて、外には見えずといふ、乙亥二十年十一月の月蝕皆既の時、西南よりか、りて、はじ  
 めは盤の中に、墨汁をこぼし入れたることくた、黒くして、そことも見えわかず、傍なる星は爛  
 爛たり、

〔狗狽集秋五〕十五夜月蝕に

まん丸な月かきもちの夜食哉

十三夜月蝕に

玄よくするや栗名月の虫くらひ

〔日本後紀桓十三〕大同元年三月乙酉一日二十是夜月蝕之、丙戌二日二十是夜月蝕之、

〔日本紀略醍醐一〕昌泰二年二月九日癸酉月蝕、在張既焉、

〔扶桑略記醍醐二十三〕裏書昌泰四年元年延喜正月十五日戊戌月食、十六日己亥有月食、

〔顯廣王記〕安元三年三月廿五日乙丑月有皆虧蝕、其色如墨暗、古今希代天變云々、

慶友略中

貞徳